



TITLE:

滿洲遠征日誌

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 滿洲遠征日誌. 天界 1927, 7(77): 331-339

ISSUE DATE:

1927-07-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161136>

RIGHT:

滿洲遠征日誌

山 本 一 清



ホーネツク彗星が来るのに、日本では其の観測の最も大切な六月が梅雨に當つてゐて、到底、完全な研究は望めない。さうしても内地から飛び出して、北海道か滿洲の、所謂梅雨の無い土地へ行かねばならない。それには、誰が行く？何うして行く？何日から？機械は？

官立の我が大學は諸經費節限の折こて、遠征隊派遣の豫算が無い。「學術の研究

を目的とする」なごこ、平常は言つて居ながら、之れでは仕方が無い。去る二月頃から、遠征の計畫を立てて、或る方面へ多少の交渉をして見たけれど、さかしく算盤玉を超越した天文研究に同情者は少ない。

彗星はいよいよ近づいて、六月1日には既に流星群が豫期されてゐたよりも早く、中村君によつて發見された。もはや、猶豫は出来ない。大學會計課から特別に工面して貰つて、ホンの單身旅行の旅費だけを補助して頂き、あこは自辨で、中村君は札幌へ、自分は滿洲へ出かけることにした。

六月13日 朝早くこつそり京都を立つことにしてゐた所が大潮記者に發見されて寫眞を撮られるやら、談話を要求されるやら——兎に角汽車は出た。

最少限度の旅装で、それに、あちらへ着いてからは西岡支部長のあらゆる御世話を御願ひしやうと圖々しく構へたので、肝腎の観測器械さへもロクに持たなかつた。只、之れだけは止むを得ずとして、クローメートルと、セスキタントと、それに徑5センチの手製カメラとを大事に携帯したのみ、珍らしい天象を観測すべく餘りに見すほらしい旅である。

午後1時半、岡山縣で水野奥田兩氏に見送られ、同10時には下關で廣津支部長始め四人の會員に迎へられ、山陽ホテルで小憩の後、昌慶丸で朝鮮

へ。六月14日午後7時、京城驛では大山氏に見送られた。京城から安東まで汽車の中で偶々會員渡邊精吉郎氏と同車し、いつもながら元氣好い聲で滿蒙經營策を聞かせて貰つた。

六月15日 午後一時、汽車は豫定の如く、奉天に着く。そこで西岡御大と渡邊守成氏に迎えられ、取り敢へず、葵町11の西岡氏方に案内された。主婦の御親切で赤飯を饗せられたのは、觀測の幸先を祝つてか？誠に有難い。

午後3時から、早速、西岡氏の奉職せられる教育専門學校へ行き、保々校長と吉池教授(共に會員)とに挨拶した。西岡氏は學生の助力を得て取り敢へず校庭に110ミリのツァイス赤道儀の据ゑ付けに着手せられ、自分は物理實驗室の一隅の窓から、セキスタントで太陽高度の觀測をした。持参したクロノメータルの時差を算出するためである。

空は晴れて、時々僅かな片雲が飛ぶに過ぎないが、今夕は未だ日の没しないうちに丸い月が出たりしたものだから、彗星觀測は着手せず、明日を樂みつゝ、入浴後、早く眠つた。(夕食中、臺灣支部の見元氏から、「四インチニテリウザ17ミギ井ンネケナラン」といふ電報が來た。勿論の事である。四インチならば1ヶ月も以前から見えてゐる筈だ。「ソノトホリ」と返電す。)

六月16日（木曜）

昨夜來、西岡氏と協議の上、觀測を、教專の校庭で無く、むしろ、西岡氏宅の邸内で行ふ方が便利、且つ安全であるとし、今日午後、苦力四人を雇つて、例の110ミリを學校庭からこちらへ運び、昨夜、見て置いた北極星の方角へ極軸を据ゑた。當地點の經緯度は、昨日來、大小幾多の地圖によつて研究した結果、ほゞ

西經	123°22′	即ち	8 ^h 13 ^m 28 ^s
北緯	41°51′		

である。赤道儀の軸を、勿論、之に合はせる。

夕食後、舊友平田已之助君が來訪せられた。同君は自分と大學時代の唯一の同窓であつて、今、當地の中學堂に奉職してゐられる。そして、宅は此の西岡氏の直ぐ御隣りとは驚いた。實に15年ぶりで話しが盡きない。——今夜も、月が早く出て、觀測には適當しない。只、機械の調節のため、又平田君に御馳走のつもりで、10時頃、屋外に出で、110ミリで龍星座の客

星井ンネツクを見た。

夜11時、5センチのカメラの焦點を決定するため、北斗星の寫眞を撮り、又、110ミリ赤道儀に附屬せる輪形測微器の恒數を決定するため、ミザール星の經過觀測をした。就床2時。

六月17日（金曜）

昨日も今日も、新聞記者君が幾人も押しかけて來るが、一通りの事は今までに幾度も話したので、同じことを繰り返すのにこちらは閉口。

昨日からの思ひ付きで、午後5時過ぎ、西岡氏宅の臺所の日當り都合が大變好いため、毎日此所に水銀盤を置いて太陽觀測を行ふ。主婦に御氣の毒であるが、觀測中、喜んで炊事の仕事を止めて下さるので有難い。

いよいよ今夜から本觀測に取りかゝる。未だ薄明るい7時半から、外に出て、110ミリで金星や火星を覗き、又、昨夜の續きで、輪形測微尺の恒數測定をやる。9時、全く夜の空になつたので、双眼鏡で井ンネツク彗星を捜し當てたが、注意すれば肉眼にも好く見えてゐる!!見事な光輝である。9時13分から同44分まで、5cmカメラにイルフォド赤札板を裝填して、之れを撮影した。次いで又、僅か5分時間の短時間撮影をやつた。宅の洗面所を俄かに寫眞室として占領し、今の二枚の乾板を現像して見るに、兩方共、見事に出てゐる。彗星は、今夜、双眼鏡(4センチ、3倍)で6等級、110ミリの30倍では7等級であるが、30分曝寫の寫眞ではむしろ5等級に近い。9時26分、蛇遣ひ座に井ンネツク流星らしい4等級のものを見る。

今夜も9時過からは明るい月が出て來て彗星觀測を妨けたが、餘り好く晴れてゐるので夜半以後110ミリで、變光星を幾つか觀測し3時に就床した。

六月18日（土曜）

朝9時起床、(朝ね坊は御許し願ひ度い。)

西岡氏は、昨日は講演のため、大石橋へ行かれたが、今日は又、大連へ行かれる。

自分は、午後の暇を幸ひ、井ンネツク彗星の天上の經路を可なり精密に星圖の上に畫いた。今後、日々の觀測のため旅行案内である。

午後5時半より、例により、臺所で、タイムの觀測。(もはや、心得て、主婦の方から催促される。)

夕食後、観測着手、先づ、未だ明るい間に、北極星を追ふて、赤道儀の極軸を正しく天極に向け、8時40分、ほぼ目的を達した。之れで寫眞撮影は大に樂らくなる。

9時2分から井ノツケ彗星の撮影、空が好く晴れてゐるので、思ひきつて、10時2分まで、前後1時間の曝寫を試みた。カメラの焦點距離は20cmであるのに、之れを案内(ガイド)する望遠鏡の焦點距離が1メートル半もあるので、撮影は骨が折れない。曝寫中に、時々、流星を捜すぐらゐの暇はある。1時間の曝寫に次いで、5分間のものを一枚撮つた。現像して見たら、何れも好く出てゐる。殊に前者は流石に立派で、彗星の全光度は4等級にも見える。

月は10時頃から東の空を明るくして了つたが、晴空を惜しみ、南天と西天とに小遊星の若干を撮影して、床に入つたのは3時。

六月19日（日曜）

感心にも8時半に眼をさましたが、今日は日曜で、10時に御隣りの平田君の訪問を受け、約束により、午後1時から案内して貰つて北陵の見物に行つた。流石に、日本では見られない名所であるが、只、道路と其の塵埃には恐れ入らざるを得ない。歸途、郊外の東北大學と奉天城内とをドライブした。

午後5時、セキスタントで太陽の直徑を測つたが、風が強くて水銀盤が揺らぐため、高度は観測出来なかつた。しかるに、毎日の例にもれず、日没と共に風がピツタリ止んだので、西空の金星を観測して、タイムを決定した。同時に、北極星の高度をも測定した。緯度算出の一材料である。

8時56分から彗星の撮影。空には9時10分頃まで薄雲があつたが、其の後晴れた。9時12分頃、全市の電燈が、停電で、暫く消えたが、吾が寫眞撮影のためには平常の妨害が無くなつて大變幸ひであつた。今夜は赤道儀の自働装置が少しく圓滑を缺くやうに思はれるが、多分、機械のバランスの取れてゐないためらしい。夜半より空には少しく雲が出たが、變光星を少しく見た後、2時就床。

六月20日（月曜）

今朝早く西岡氏は大連より歸られた。自分は9時半起床。去る17日以来

撮つた井ンネツク彗星の寫眞を検査し、彗星の毎日の位置を星圖の上に書いて見て、之れをミリメートル尺で測定して見たが、其れによるこゝ、英國のクロンメリン老が算出した軌道要素——殊に、近日點が六月21日 1564（萬國時刻）といふのは明らかに誤りであることを知つた。自分の觀測と計算とからは、近日點通過の時日は、六月21日093 となる。そこで、午後には上田助教授へ、此の事をブレテンの原稿として送る。

夕食の時、西岡氏は近頃買はれた内外の天文書を多く見せられた。皆、堂々たる専門書である。西岡氏も、仲々、丸善の虫であるワイ。

8時から、金星の觀測。9時過ぎから彗星の寫眞觀測例の通り、空には時々雲が飛ぶ。しかし、もはや、月の出る時刻が遅くなつたので、彗星觀測には極めて都合が好い。——今夜は彗星の寫眞を三枚撮つたが、多分現象液が好くないためか、星像が立派に出ない。尤も彗星の位置は明らかに出てゐるが。

夕方、佛教婦人會の人々が數人來られたので、西岡氏は16センチ反射鏡で金星など見せてゐられた。

六月21日（火曜）

午後3時、木村寫眞店員が、かねて頼んで置いた井ンネツク寫眞H第5號（奉天で撮つた寫眞第5 號）の引き延ばしを一枚持つて來た。可なり好く出來ては居るが、未だ充分に彗星のコマなぞが出てゐない。尙、一層の努力を依頼した。寫眞屋も、之れが何物の寫眞像やら知らないで仕事をしてゐたのだから、マア許すべし。「彗星の寫眞なんだよ!!」と言つてやつたら「ハア、さうですか!？」

夜、好くも晴れた！晴れた!! 之れが本當の滿洲日和。西岡氏も、令息と共に、反射鏡「三吋」をもち出して、いろいろの星を見てゐられる。自分は始め金星でセキスタントの零點決定をやつたが、風のため、タイムは中止。8時57分から彗星の撮影に着手する。曝寫は1 時間のもの1枚、30分のもの3枚、合計4枚。——彗星は愈々龍座を去つて、琴座に入つた。運動も益々速い。30分の曝寫中に、幾度も幾度も彗星は微恒星を掩ふ。反射鏡でも彗星を見たが、さすがに見事なものである。彗星のコマが一方に延びて、尾の出來始めのやうにも見えるが、如何？全光度は、肉眼で、確か

に4等級である。自分の計算に據れば、今日は彗星が午前10時7分に近日點を通過した筈である。

六月22日（水曜）

今日は大悲觀の日である。自分が奉天に到着した15日以来、昨日までは毎日、空が晴れて、天の觀測は見事に續けられた。それに月は漸次退き、機械の調子もよく、カメラの焦點もうまく決定された。7日間續いた晴天は今10日間此のまゝ續いて呉れるやうに祈り、且つ、勇んでゐたのに、今朝、眼ざめて見れば、空一面の雨雲で、午後からはボツボツと降り始め、夜に入つても止まない。それでも、「満洲の空だ!!」もしや、夜半にでも晴れるか知れない」こ、何時でも起き上がれるやうに、晝着のまゝで假りねをしたが、夜中いつ眼をさまして見ても、窓外の雨の音は止まなかつた。夢ばかり見た。

六月23日（木曜）

午前中は空に雲があつたけれど、午後には誠に気持ちよく晴れた。但し風が可なり強いので、五時頃、セキスタントで太陽の直徑など測つた後、タイム觀測は中止。(タイムは夕食後、西天の金星高度を觀て測つた。)

午後九時、空の闇になるのを待つて、天を見上げるこ、井ンネケ彗星は既に琴座を去つて、白鳥座に一步を踏み入れた。すぐ、寫眞の撮影を始め井ンネケ彗星を三枚（うち一枚、長時間曝寫のやつは感光フィルムを轉倒したこが現像後に知れた）、それから、ステアンス彗星、小遊星二つ三つ、夜半から後には北極附近の長時間撮影をやつた。二時から又井ンネケの撮影に取りかゝつたが、生憎、二時二十分から曇り。

六月24日（金曜）

昨夜から曇り續け、午後五時頃には激しい雷雨となつたが、夜十一時になつて奇麗に其れが晴れて大喜び、早速、赤道儀の掩ひを取り拂つて觀測開始、彗星はもはや狐星座にある。あらかじめ知れてゐるこゝは言ひながら、星の運動の速いこ速いこ!

晝間、太陽觀測が出来なかつたので、タイムは、寫眞撮影の途中、大角星を見て行ふ。

寫眞の現像を終つて、赤道儀には掩ひかけやうと思つてゐる時、突然、

家の戸を叩くものがある。開けて見れば其れは滿洲日々新聞の記者二人、『觀測現場の狀景を寫眞に取らせて下さい』と言ふ。差支へ無いから許す。

六月25日（土曜）

晝の間、空に雲片が多少あつたので、毎日の日課の太陽高度觀測を斷念したが、夕暮から全く晴れたので、金星によりタイム觀測、それからステアンス彗星、キンネク彗星（長短二枚）の順に撮影。十時からは110ミリ赤道儀で輪形測微器によりキンネクの觀測をやつた。星の中心核が明瞭なので、此の種の觀測が樂々出来るのは嬉しい。

十一時、ちよつと休憩したが、夜半過ぎより雲が出て、雨さへ降り出したので、大狼狽で雨掩ひを機械にかけた。

六月26日（日曜）

奮發して朝八時半起床、十時には組合教會へ行き、それから浪速通りで買ひ物。

キンネク彗星の近日點時刻がほゞ 21.088日と確定したので、午後は改めて位置豫報を計算し始める。又、夕食時少し前には、かねて頼んで置いた大工さんが來たので、邸内に反射鏡の臺を、傾けて、赤道儀的に使用出来るやうにした。——出来れば、之れで寫眞を撮つて見たいのだが……

午後九時から晴れたので、ステアンス彗星の撮影を始めたが、十時には曇り、次で雨も來た。ところが夜半過ぎから見事に晴れたので、キンネクの寫眞を三枚撮影、三時就床。

六月27日（月曜）

キンネクの位置計算終る。其れによれば、此の星が地球と最近距離になるのは27日午前4時24分（日本西部標準時）であつて、距離は0.039433A.U.單位、クロンメリンの豫想よりも少しく遠い。

京都よりブレテンと共にゲール彗星出現の報至る。發見は去る10日であつたもののこゝ、之れは特に、もう少し早く知らせて貰ひたかつた。

此の日、終日ひさひ曇り空であつたけれど、こゝ數日は彗星觀測に最も大切な時なので、油斷なく、夜も空をタッチした。ところが、有難や、夜半過ぎ一時頃から雲が切れ、一時半には快晴となつたので、直ちに寫眞撮影開始、曝寫五十七分を経た頃、空は又曇り出したので仕事を止めた。しかも此の日の寫眞は現像して見事に出來てゐた！天はわざわざ吾等の觀測のため必要なだけ晴れて呉れたのだ。

六月28日（火曜）

終日曇り、大悲觀、夕刻少しく晴れたので流星が出るかこ空を見守つたが、まもなく曇り甚だし、夜半過ぎ（昨夜の如き僥倖の事があるか）忠實

に空をタッチしたけれど、今日は遂に晴れず、二時半頃から雷雨になつて來たので無條件に退却。

昨日の計算の續きで、井ンネケ彗星が降交點を通過するのは、29日午前10時59分(西部標準時)、地球が此の點に近づくのは七月1日午前7時50分55秒とわかる。

大阪放送局より來電。又、平田理學士の厚意により、明日の日蝕觀測用として、中學堂所有の110ミリのツァイス屈折鏡を運んで來て貰つた。

六月29日（水曜）

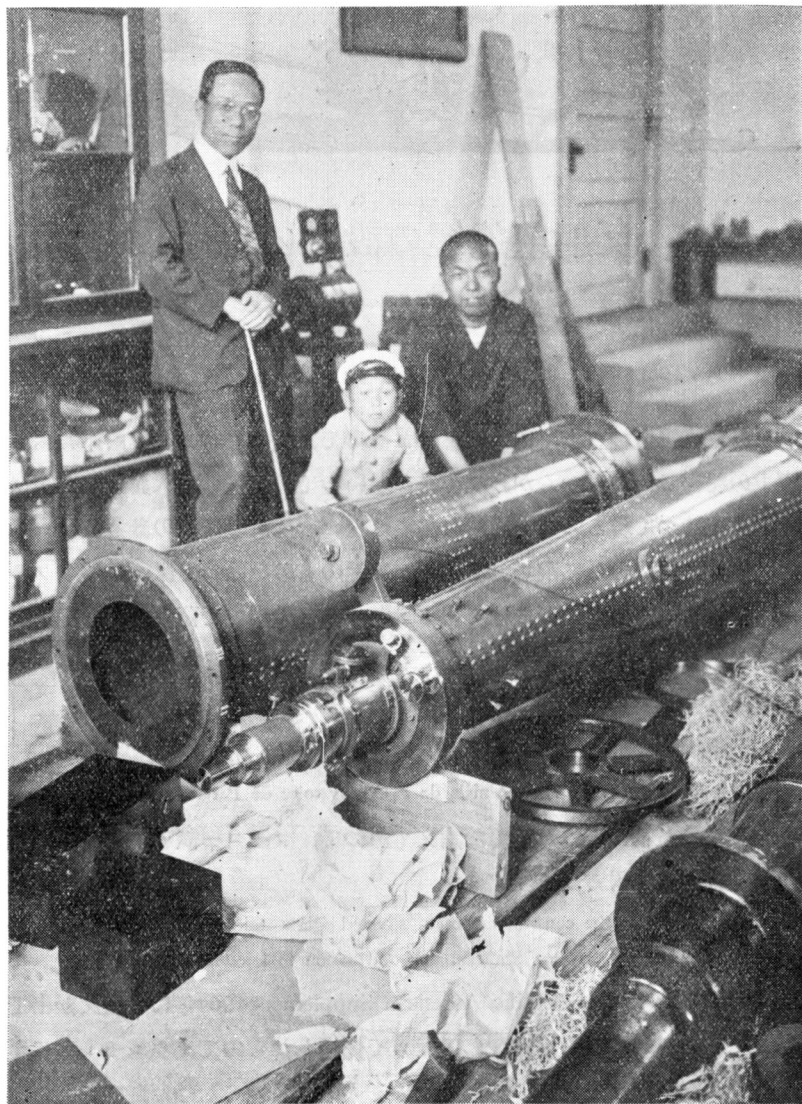
今日は日蝕の日で、朝から、空の曇りが心配であつたが、午後に幾分か雲が薄くなり、地上には日影さえ見えるやうになつた。西岡老も自分も大喜び、大小の望遠鏡(總計5臺)を後邸に持ち出して準備を怠らず。二時には助手として教育専門學校の生徒8名も來て呉れた。蝕の初觸は午後2時47分40秒(位置角は上より 267°)であつたが、之れは首尾好く觀測が出來た。そのうちに、中學堂の生徒50名ばかり、見學に來たので、自分は部分蝕の形を投影して見せた後、約30分にわたり講話をした。次いで、豫定の終觸時刻午後4時28分50秒(位置角は 353°)に近づいたが、こんどは雲が厚くて、遂に觀測は不可能であつた。

夜は好く晴れたので、先づ金星高度を測り、それから、ステアンス彗星、バラス、セレス及びバルテノーベの順に寫眞撮影を始めた。此のセレスの撮影中、俄かに天空がバツミ明るくなり、驚いて見上げるに、今撮影中の、蛇遣ひと蝸あたりに一大流星が飛んだのであつた。色は赤黃、光芒著しく光輝はほゞ14ミ見積る。しかも之れが撮影中の寫眞板中に完全に收められたのだから愉快である。

井ンネケは今はほゞ南に遠ざかつた。夜半過ぎ。遙か低い東天に見えたので、二枚の寫眞を取つた。しかし、二時半には既に東北の天空が白んで來たので、中止。

六月30日（木）

晝間、晴れて、可なり蒸し暑い。午後三時から、教專 YMCA の人々に頼まれ、同校内で講話。それから校長の晚餐會に招かれた。——午後八時過ぎ、宿に歸つたが空は四方に低く雲がある。「今夜は、何よりも先づ流星を見ねばなるまい」と思ひ、九時よりタッチし始めるに、果して大きな流星が數多く飛ぶ。九時四十五分、雲のため中止したが、前後40分時間に7個の流星を見、其の中の6個は明らかに井ンネケ族であつた。——其の後、夜明まで、遂に晴れず。(つゞく)



京都大学の新しい屈折大望遠鏡（六月號参照）

口径30センチ(12インチ)、焦点4.5メートルの、日本第一の逸物が去る6月10日到着した状景。(人物は左から山本教授、山本修君、中村要氏)。之れは7月20日首尾よく大ドーム内に据え付けられた。